

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：31501

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18H00749

研究課題名（和文）狩猟採集文化と農耕文化の接触による社会の変容と地域的多様性に関する学際的研究

研究課題名（英文）Multidisciplinary research for social transition and local varieties by cultural contacts between hunter-gatherers and agricultural cultures

研究代表者

青野 友哉（AONO, TOMOYA）

東北芸術工科大学・芸術学部・准教授

研究者番号：60620896

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、狩猟採集文化と農耕文化の接触による社会変容の実態の解明である。北海道有珠モシリ遺跡の発掘調査では11体分の頭骨を含む縄文晩期の多数遺体再埋葬を検出し、人骨が上顎側切歯の抜歯と頭部の外傷を高頻度を持つことを明らかにした。これにより、九州の弥生早期に併行する時期の北海道において、埋葬方法と抜歯習俗に本州的影響を確認できたうえに、「戦闘傷痕」について今後議論できる材料を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では縄文晩期から弥生/続縄文期への移行期の北海道において、本州以南からの影響が葬墓制や抜歯習俗など社会的風習にまで及ぶことを明示した点と、人骨の戦闘傷痕に関する議論の活発化が期待できる成果に学術的意義がある。また、本研究が示す日本列島内の多様な歴史・文化の存在は、現代における異なる民族・文化への理解を助ける点で社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to elucidate the reality of social transformation in contacts between hunter-gatherer and farming cultures. An excavation was conducted at the Usu-moshiri site in Hokkaido, which uncovered a large number of reburied human remains from the final Jomon period, including 11 skulls. Many of these skulls exhibited signs of maxillary lateral incisor extraction and external head wounds. These findings indicate influences from Honshu on the burial methods and dental extraction practices in Hokkaido during the same period as the early Yayoi period in Kyushu. In addition, this study provides a foundation for future examinations of "battle wounds."

研究分野：考古学

キーワード：狩猟採集文化 農耕文化 文化変容 縄文晩期 続縄文期 多数遺体再埋葬 有珠モシリ遺跡

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

南北に長い日本列島は、現代までの各時代を通して自然環境の違いがあり、これに人類の文化的活動が加わることで多様な地域性が存在する。考古学研究においては、縄文時代の土器文化圏の違いを始めとし、どの時代においても地域文化間の相互交流の実態を解明することは大きなテーマである。

ところが、縄文時代のように基盤となる文化要素の多くが近似している場合、搬入遺物などから地域文化間の影響は指摘できても、元々の両者の差が小さいために、交流の具体的な内容と過程を示すのは難しい。この課題を解決するには、まず文化の差が際立った時代と地域を選定し、文化接触による社会の変容の具体例を示す必要がある。

本研究では狩猟採集社会から農耕社会へと移る弥生時代（北海道は続縄文期）の九州から北海道を対象にし、弥生文化と続縄文文化の相互の関連性を最新の手法で明らかにする。これにより、異文化間の人の移動とその方向、規模（人数）、目的などの具体的事例を明瞭に示すことができ、研究成果は他の時代の文化研究にも活かせると考える。

なお、狩猟採集社会から農耕社会への移行は、本格的な農耕社会となるまでの期間や社会の階層化の程度に差があり、地域的に一律ではない。つまり、日本列島各地には「続縄文」と同様の「過渡期」が存在し、その長短と文化変容の違いにより、地域的に多様な文化を生んだといえる。本研究はこのような視点に立ち、単に北日本地域という限られた範囲を扱うのではなく、日本列島全体における文化変容の過渡期を対象とする。

2. 研究の目的

本研究は弥生文化と続縄文文化を対象として、文化を分ける要因と形成過程、そして文化間交流の実態を明らかにすることを目的とする。従来は両文化の生業の違いを単に緯度・寒暖の違いや文化の中心とされる地域からの地理的な距離によって説明されてきた。しかし、農耕が伝播する直前の縄文晩期は日本列島全体で貝塚が減少しており、一時的かつ急激な温暖化とその後の気候の揺り戻しが狩猟採集社会に変動をきたし、稲作に適した地域では農耕社会の受容につながった可能性がある。つまり、文化伝播のメカニズムには環境の変化への人類の対応も含まれるのであり、その対応のあり方が地域ごとに異なっていたことが文化を分ける要因であると仮定する。

このように異文化の存在を「文化の高低」で説明するのではなく、ニュートラルな視点で弥生と続縄文の問題を捉え直し、実証する点に本研究の学術的独自性がある。これはアイヌ文化と日本文化の関連を見ることや、現代の多文化共生社会について考えることについて、新しい視点を提示できるものである。

3. 研究の方法

本研究は考古学のみならず、地質学、人類学、文化財科学との協働で各分析を実施し、研究会を通して各分野の成果を統合する。実施項目は、（1）有珠モシリ遺跡の再整理作業と再発掘調査、（2）北海道有珠地区の地質学的調査による古環境復元、（3）有珠モシリ人骨のエナメル質減形成に関する調査研究、（4）続縄文・弥生人の歯石の残存デンブレン粒分析である。

（1）は考古学班が担当し、約30年前に札幌医科大学により調査され、南海産貝製品の出土で注目された伊達市有珠モシリ遺跡の再整理・再発掘によって行う。既往の調査で検出された墓址の詳細な時期決定を行うほか、再発掘により本州的要素を示す再葬墓を検出する。再葬墓は最



図1 北海道噴火湾沿岸と有珠モシリ遺跡の位置

新の調査手法と理化学的分析手法を用い、再葬原理の解明を目指す。

(2) は地質学班が担当し、1970年代まで残存した沼のボーリング調査と有珠モシリ遺跡の検土杖調査を実施する。合わせて噴火湾八雲沖の海底コアを基にした海水温・気温推定の成果との比較を行う。

(3) は人類学班が担当する形態学的分析や DNA 分析とともに古病理学的分析で、札幌大調査出土人骨に対して実施する。なお、2020年度検出の多数遺体再葬墓出土の11体については分析途中であるため、本実績報告書には記載していない。

(4) は文化財科学班が担当し、北海道内の続縄文人骨と本州の弥生人骨の歯石の残存デンプン粒を取り出して、植物質食料の種類を特定し、個体差や集団差を検討する。北海道では、種類の保管用とされる田舎館式土器の無頸壺と蓋が出土しており、続縄文人は雑穀の他に本州から搬入された米を食べた可能性も考えられることから、理化学的分析を行い検討する。

以上のように、考古学的な研究課題を学際的に追究して統合する研究手法をとっている。

4. 研究成果

(1) 北海道有珠モシリ遺跡における多数遺体再葬墓の調査

本州と北海道との接触を示す事例を調査するため北海道有珠モシリ遺跡の墓址の調査を実施した。発掘調査では多数遺体再葬墓1基を検出し、人骨や出土品の出土状態を観察する「埋葬環境判別法」を用いて埋葬過程の復元を試みた。

有珠モシリ遺跡は噴火湾（内浦湾）東岸の伊達市有珠地区に所在する。遺跡は有珠湾の湾口に位置する約10,000㎡の小島中にあり、遺跡からは北東に活火山である有珠山を、南に噴火湾越しに森町の駒ヶ岳を望むことができる。1985～1989年の札幌医科大学解剖学第二講座による発掘調査では縄文晩期から続縄文期にかけての墓址と副葬品が見つかった。中でも本州以南との交流を示す南海産イモガイ製腕輪や写実的なクマが彫刻された匙型製品の出土により続縄文文化の内容を示す遺跡として知られるようになった。

2018年からは伊達市噴火湾文化研究所が中心となり「狩猟採集文化と農耕文化の接触による社会の変容と地域的多様性に関する学際的研究」【科研費18H00749 基盤研究(B)】の一環として札幌大調査の出土遺物の再整理と遺跡の測量調査を行なった。2019年には札幌大調査区を再発掘し、かつて遺構確認はしたものの手を付けずにいた「18号墓」を再検出したことから、新たに調査区を拡張(2m×1.5m)して墓坑の上部にある続縄文期の礫層と貝層を調査した。

2020年9月には18号墓内を調査し、平面が直径約1.2mの円形の墓坑内に11個体の頭骨を含む人骨群が出土した(写真1)。墓坑は有珠山岩層なだれ堆積物である巨岩の隙間に掘られている。墓址の時期は墓坑覆土および底面付近から大洞A'式併行の土器が出土しており、現段階では縄文晩期末と考えている。次年度以降に墓坑底面の精査を行う際に、時期決定を行う予定である。

人骨の出土状況は、墓坑の北壁と南壁に頭骨が列状に並び、中央には束ねられたように長軸方向が揃った四肢骨が集中し、寛骨と肋骨の集中箇所がそれぞれあった。また、墓坑全体から指骨などの手足の骨が多数出土している。列状の頭骨の顔面は、北壁の4体のうち3体が南を、南壁の7体のうち6体が北を向いており、向かい合った状態にある。また、上顎と下顎が接した頭骨や、大腿骨遠位端に膝蓋骨が接している例があるものの、大半の人骨が解剖学的位置関係になく、かつ頭骨の配列や部位ごとの集中といった意図的な配置がみられる。このことから18号墓は再葬(複葬)墓といえる。

今回検出された多数の遺体を集積した再葬墓は、北海道内の八雲町栄浜1、恵庭市カリンバ、厚真町朝日、



写真1 北海道有珠モシリ遺跡の多数遺体再葬墓(18号墓)



写真2 左眼高上に陥没治癒痕跡(写真右側)が見られる人骨

釧路市幣舞など各遺跡検出の多数合葬墓とは異なり、遺体を再埋葬する習俗の存在を示す。すでに札幌大調査では縄文晩期の再葬墓とともに、再葬目的で掘削を受けた縄文晩期の一次葬墓が検出されており、18号墓との関連性の整理と埋葬過程の検討が必要である。

なお、再埋葬人骨を主体とする墓址の類例は、取手市中妻、松戸市牧之内、市川市権現原、田原市吉胡・伊川津・保美など、東北部から東海にかけての縄文後・晩期の遺跡に見られ、地域を超えた再葬原理の解明も課題となる。

出土人骨 11 体は、頭部に断面楔状の陥没を有する個体が 6 体、陥没治癒痕を有する個体 2 体、脛骨に黒曜石片が刺さり炎症を起こした個体 1 体があった。頭部への利器による傷跡は一次葬墓の再掘削時について可能性や儀礼的処置によるものも考えられるが、頭部の陥没骨折と脛骨に矢か槍先が刺さった後も生存していた個体が含まれる点を考慮すると「戦闘傷痕」の可能性があり、今後議論する必要がある。

また、抜歯は 11 個体中 7 体（上顎右側切歯 1、上顎左側切歯 6）に認められた。北海道内では洞爺湖町高砂貝塚の縄文晩期人骨にも同型式の抜歯例が存在するが全体数は少ないため、本州以南の習俗の伝播という点で注目される。

今後は墓坑の時期決定と人骨の年代測定、形質人類学的分析、DNA 分析の結果を踏まえて、多数遺体再葬墓の埋葬形態、抜歯習俗、戦闘傷跡、血縁関係について本州各地の遺跡との比較を行うことで、文化接触による影響を評価したい。2021 年度の発掘調査では墓坑底部の精査により、墓址の時期の決定と墓坑構造の把握を行う予定である。

(2) 北海道有珠地区の地質学的調査による古環境復元

縄文晩期～縄文晩期における有珠地区の古環境（噴火、津波を含む）を復元するため、かつて沼であった伊達市有珠小学校の隣接地でボーリング調査を実施し、AMS による放射性炭素年代測定、火山灰同定、珪藻および花粉の分析を行った。また、有珠モシリ遺跡の調査区で検土杖を用いた地質調査も行った。

かつて沼であった有珠小学校隣接地（標高約 6m）の 2 地点をボーリング調査し、地点 1 では地表下約 15m まで、地点 2 では地表下約 7m までの堆積物が得られた。地点 1 コアから採取された 8 試料と地点 2 コアから採取された 2 試料の AMS 法による放射性炭素年代測定を実施した。年代測定の結果、層序的におおよそ整合的な年代値が得られたが、地点 1 コアの深度 9.95m と 9.58m の試料で年代値の層位的逆転が見られた。

有珠地区では約 2 万～7 千年前の有珠山善光寺岩層なだれ堆積物（Zd）が広く堆積し、深度 12.50～10.00m の堆積物（火山岩礫や軽石、スコリア、材片が混在するシルト質砂）はこのなだれ堆積物と判断されることから、年代値の逆転は山体崩壊なだれの際に様々な時代の堆積物を巻き込んだためと推定される。

なお、有珠山善光寺岩層なだれ堆積物（Zd）の堆積時期については、これまで約 2 万～7 千年前の中で複数の年代が報告され（例えば、藤根 2016）、新たなデータの蓄積による再検討が必要となっている。本調査結果では、15126-14701calBP（ 2σ ）の後で、約 6162-5872calBP（ 2σ ）の前に堆積したことが読み取れる。

有珠モシリ遺跡の立地するモシリ島では、1640 年の駒ヶ岳噴火・津波の影響を探ることを目的とし、津波が侵入してきたと推定される島の南側において沿岸部から内陸部へ向かって複数箇所検土杖調査を実施した。結果、調査グリッド交点 H7 から G7 方向への直線上 6.6m 地点 a および 13.88m 地点 b の 2 箇所、その痕跡を確認した。交点 G7 は標高が 2.394m で海岸からの距離は約 40m であり、少なくともこの付近までは津波が遡上したと推定される。

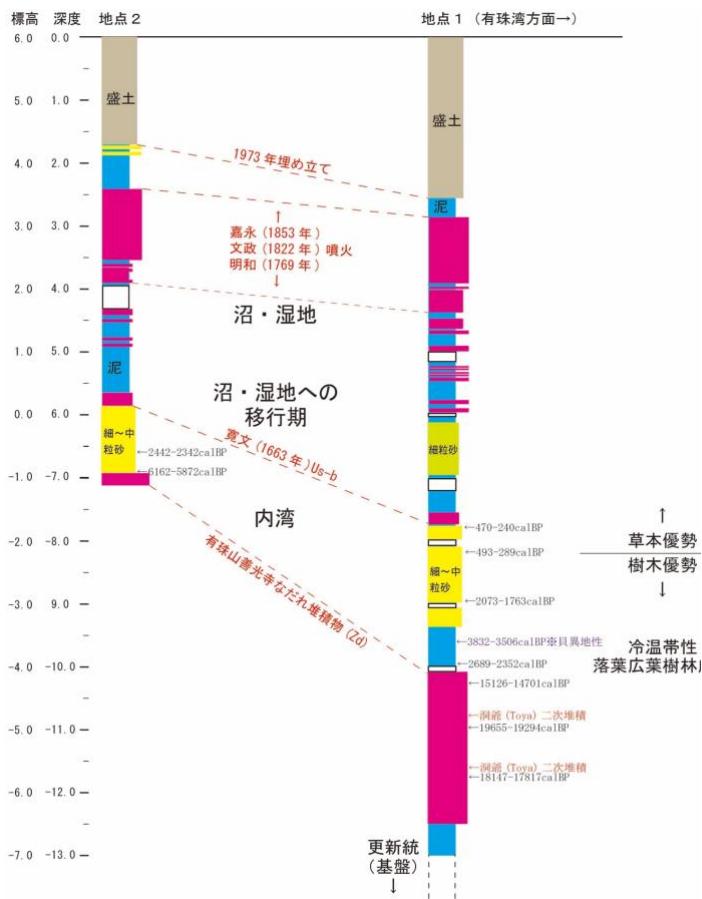


図 2 柱状図および推定された古環境の変遷

引用文献

藤根 久・遠藤邦彦・鈴木正章・吉本充宏・鈴木 茂・中村賢太郎・伊藤 茂・山形秀樹・Lomtavidze Zaur・横田彰宏・千葉達朗・小杉 康 (2016) 有珠山善光寺岩屑なだれの発年代の再検討-有珠南麓の過去2万年間の環境変遷との関連で-. 第四紀研究, 55-6, 253-270.

(3) 有珠モシリ人骨のエナメル質減形成に関する調査研究

狩猟採集を主要な生業とした縄文社会から稲作農耕弥生社会に移行する時期に本州以南の人々と交流していた有珠モシリ集団の生活・健康水準を明らかにするため、下顎犬歯を対象として、有珠モシリ遺跡出土人骨群、北海道の縄文・続縄文時代人、本州以南の縄文時代人、西日本の渡来系弥生時代人のエナメル質減形成の出現状況を比較検討した。

資料に用いたのは、有珠モシリ遺跡(札医大調査)から出土した下顎犬歯11点、北海道縄文時代人の下顎犬歯35点、続縄文時代人の下顎犬歯15点、本州以南の縄文時代人の下顎犬歯316点、渡来系弥生時代人の下顎犬歯254点である。これらは、本来の歯冠長の半分以上が残存しているとみなされた歯で、歯冠長の歯根側半分以下の部分を調査範囲とし、LEDライトを照射し10倍拡大鏡で歯冠状態を確認しながら、溝状ないし小窩列状の減形成をカウントした。得られたデータをもとに、集団別に、減形成出現率(減形成が出現した歯の数/全ての歯の数)と歯1点あたりの減形成出現数を求めた。

有珠モシリ集団と縄文・続縄文時代人との間に、減形成出現率の明確な差は認められなかった。他方、渡来系弥生時代人に比べると、有珠モシリ集団の減形成出現率は高い傾向にあった。この結果は、渡来系弥生時代人の社会における健康水準が縄文社会より良好であったことを示唆するとともに、有珠モシリを含む続縄文社会における健康水準が縄文時代と大差なく、生活環境において渡来系弥生社会の影響が大きく及んでいなかったことをうかがわせるものである。なお、コロナ禍もとの行動制限により、今回検討した有珠モシリ人骨は1980年代の発掘で出土した資料に限られた。今後、2020年出土人骨のエナメル質減形成を調査して資料数を増やすことで、より信頼性の高い結果を提示したい。

(4) 続縄文・弥生人の歯石の残存デンプン粒分析

弥生人と続縄文人の歯に付着した歯石の残存デンプン粒分析を行い、摂取された植物質食料を明らかにする。対象資料は、有珠モシリ遺跡の人骨6個体・歯石試料9点、有珠オヤコツ遺跡の人骨4個体・歯石試料6点、礼文華遺跡の人骨3個体・歯石試料3点、オンコロマナイ遺跡の人骨2個体・歯石試料2点、オシヨンナイ2遺跡の人骨1個体・歯石試料1点、枯木宮遺跡の人骨1個体・歯石試料1点である。試料採取の折は、歯の表面を傷つけないように留意してスクレーパーで歯石を採取した。歯石からの抽出作業(顕微鏡観察前の処理)とプレパラートの作製、検鏡は東京大学総合研究博物館で行った。

歯石に対する分析の結果、有珠モシリ遺跡では人骨3個体よりデンプン粒3個、有珠オヤコツ遺跡では人骨2個体よりデンプン粒3個、礼文華遺跡では人骨2個体よりデンプン粒4個、オンコロマナイ遺跡では人骨1個体よりデンプン粒1個、枯木宮遺跡では人骨1個体よりデンプン粒1個が検出された。検出量は1~4個とそれほど多くないが、有珠モシリ遺跡では球根類、有珠オヤコツ遺跡ではイネ科種子や堅果類、礼文華遺跡ではイネ科種子と球根類に由来する可能性を考慮することができる。いいかえれば、遺跡の居住者たちはこれらの植物を食物として摂取していたといえる。これらの植物の食用方法については、今回検出したデンプン粒の状態から道具などを復元できるわけではないが、粒子の膨張や糖化を示すデンプン粒が含まれており、加熱調理が行われていたことを示唆している。有珠モシリ遺跡、有珠オヤコツ遺跡、礼文華遺跡、枯木宮遺跡において、これらのデンプン粒が確認された。

食の個人差については、デンプン粒の検出量自体が非常に少ないため、検出個体間で明確な差異は認められなかった。つまり、残存デンプン粒分析だけでは、個人間の食の差異の検討が困難であるといえる。ただし、デンプン粒の種類をみると、由来する植物の候補として、球根類やイネ科種子などがあげられる。そのため、食の多様性が存在した可能性は推測することができるだろう。

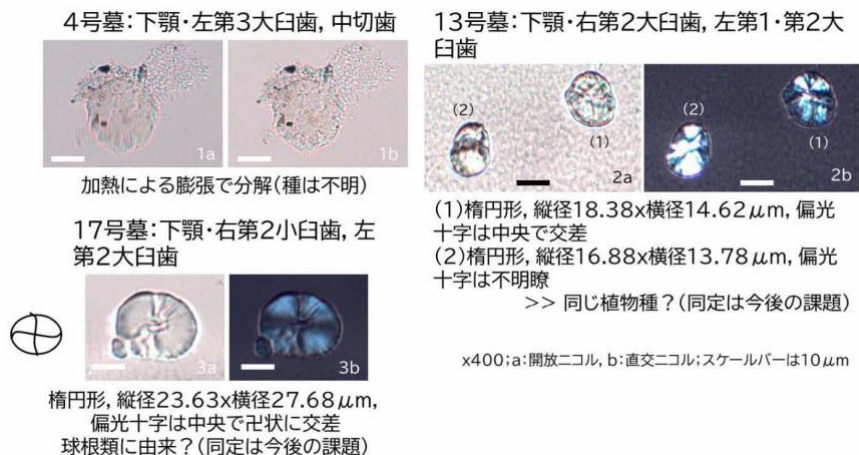


図3 有珠モシリ遺跡の人骨の歯石から検出したデンプン粒

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計26件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 青野友哉	4. 巻 1
2. 論文標題 北海道南西部の縄文時代の装身具	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 身を飾る縄文人 副葬品から見た縄文社会	6. 最初と最後の頁 51-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青野友哉	4. 巻 1
2. 論文標題 すぐには埋めない墓 - 遺体の埋没状況 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 縄文時代文化研究会第2回研究集会発表要旨「縄文時代葬墓制研究の現段階」	6. 最初と最後の頁 87-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青野友哉	4. 巻 150
2. 論文標題 葬墓制と葬送儀礼を考える 縄文時代	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青野友哉	4. 巻 739
2. 論文標題 東北日本の玉類の流通	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 18-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青野友哉・北野博司・渡部裕司	4. 巻 15
2. 論文標題 酒田市生石2遺跡発掘調査概要報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史遺産研究	6. 最初と最後の頁 51-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 青野友哉・永谷幸人	4. 巻 15
2. 論文標題 有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史遺産研究	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 青野友哉	4. 巻 57
2. 論文標題 北海道伊達市 有珠モシリ遺跡の再葬墓の調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道考古学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青野友哉	4. 巻 32
2. 論文標題 研究集会『縄文時代葬制研究の現段階』に参加して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 縄文時代	6. 最初と最後の頁 14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kanzawa-Kiriyama H., Jinam T.A., Kawai Y., Sato T., Hosomichi K., Tajima A., Adachi N., Matsumura H., Kryukov K., Saitou N., Shinoda K.	4. 巻 27
2. 論文標題 Late Jomon male and female genome sequences from the Funadomari site in Hokkaido, Japan.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Anthropological Science	6. 最初と最後の頁 83-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠田謙一, 神澤秀明, 角田恒雄, 安達登	4. 巻 127
2. 論文標題 西北九州弥生人の遺伝的な特徴 -佐世保市下本山岩陰遺跡出土土人骨の核ゲノム解析-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Anthropological Science (Japanese Series)	6. 最初と最後の頁 25-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠田謙一, 神澤秀明, 角田恒雄, 安達登	4. 巻 219
2. 論文標題 鳥取県青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨のDNA分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 159-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠田謙一, 神澤秀明, 角田恒雄, 安達登	4. 巻 219
2. 論文標題 福岡県那珂川市安徳台遺跡出土弥生中期人骨のDNA分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 195-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠田謙一, 神澤秀明, 角田恒雄, 安達登	4. 巻 219
2. 論文標題 香川県高松茶臼山古墳出土古墳前期人骨のDNA分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 217-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠田謙一, 神澤秀明, 角田恒雄, 安達登, 土肥直美	4. 巻 219
2. 論文標題 沖縄県読谷村出土貝塚時代人骨のDNA分析 -木綿原遺跡・大当原遺跡-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 291-295
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新美倫子	4. 巻 1
2. 論文標題 具志原貝塚2018年度調査出土の動物遺体	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 具志原貝塚発掘調査報告書	6. 最初と最後の頁 57-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新美倫子	4. 巻 2
2. 論文標題 天白遺跡出土の動物遺体	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 天白遺跡発掘調査報告書	6. 最初と最後の頁 189-193
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西本豊弘	4. 巻 2
2. 論文標題 冬島遺跡平成30年度調査出土の動物遺体	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 様似郷土館紀要	6. 最初と最後の頁 45-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 青野友哉	4. 巻 143
2. 論文標題 埋葬行為復元の骨考古学的意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 添田雄二・青野友哉	4. 巻 146
2. 論文標題 17世紀の自然災害とアイヌ社会 - 伊達市の調査事例から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 87-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 澤田純明	4. 巻 143
2. 論文標題 ストレスマーカーから探る過去の人々の健康状態	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 43-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 澤田純明	4. 巻 714
2. 論文標題 人骨のミクロ・マクロ形態分析による生活環境復元	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 10-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新美倫子	4. 巻 144
2. 論文標題 北海道の海獣狩猟	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 30-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新美倫子	4. 巻 54
2. 論文標題 北海道釧路市東釧路貝塚出土の魚類遺体	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道考古学	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 新美倫子	4. 巻 1
2. 論文標題 北海道北部における縄文時代遺跡の分布について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 旧石器時代文化から縄文時代文化の潮流	6. 最初と最後の頁 461-470
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Matsumura, H., Shinoda, K., Shimanjuntak, T., Oktaviana, A.A., Noerwidi, S., Sofian, H.O., Prastiningtyas, D., Nguyen, L.C. Kakuda, T., Kanzawa-Kiriyama, H., Adachi, N., Hung, H.C., Fan, X., Wu, X., Willis, A., Oxenham, M.F.	4. 巻 13-6
2. 論文標題 Cranio-morphometric and aDNA corroboration of the Austronesian dispersal model in ancient Island Southeast Asia: Support from Gua Harimau, Indonesia.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PLoS ONE	6. 最初と最後の頁 e0198689
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shinoda, K. Kakuda, T., Doi, N.	4. 巻 44
2. 論文標題 Mitochondrial DNA analysis of the skeletal remains excavated from the old Tokijin tomb, located in the Nakijin village of Okinawa Island	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Bulletin of the National Museum of Nature and Science Series D Anthropology	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 青野友哉・永谷幸人・西本豊弘
2. 発表標題 北海道有珠モシリ遺跡における多数遺体再葬墓の調査速報
3. 学会等名 関西縄文文化研究会オンライン10月例会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 青野友哉・永谷幸人・西本豊弘
2. 発表標題 北海道伊達市有珠モシリ遺跡の再発掘調査
3. 学会等名 第73回日本人類学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoya Aono., Hodaka Kawahata., Yuuji Soeda.
2. 発表標題 Regional Differences of Environmental Adaptation in the Transition Phase from a Hunting-Gathering Society to an Agrarian Society
3. 学会等名 40th Association for Environmental Archaeology Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 青野友哉
2. 発表標題 すぐには埋めない墓 - 遺体の埋没状況 -
3. 学会等名 縄文時代文化研究会第2回研究集会「縄文時代葬制研究の現段階」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 永谷幸人・青野友哉
2. 発表標題 伊達市 有珠モシリ遺跡
3. 学会等名 北海道考古学会遺跡報告会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤田純明
2. 発表標題 長江デルタの新石器時代人骨から得られた骨考古学的知見：特にストレスマーカーと加工人骨について
3. 学会等名 第73回日本人類学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 澤田純明
2. 発表標題 良渚遺跡群から出土した加工人骨
3. 学会等名 日中合同報告会「稲作と中国文明 - 総合稲作文明学の新構築」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渋谷綾子
2. 発表標題 歯石の残存デンプン粒にもとづく長江下流域新石器時代の植物食復元
3. 学会等名 第73回人類学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渋谷綾子, 孫国平, 劉斌, 王寧遠, 陳傑, 宋建, 岡崎健治, 板橋悠, 中村慎一
2. 発表標題 人骨の歯石に残るデンプン粒からみた長江下流域新石器時代の植物食
3. 学会等名 第73回日本人類学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渋谷綾子・岡崎健治・澤田純明・宮田佳樹・覚張隆史・米田穰
2. 発表標題 長江下流域の新石器時代における食性と古病理
3. 学会等名 日本考古学協会第85回(2019年度)総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tomoya Aono
2. 発表標題 Possibility of “ fictive kinship ” in Jomon culture
3. 学会等名 The Twelfth International Conference on Hunting and Gathering Societies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 青野友哉, 吉村和久, 山口晴香, 米田穰, 澤田純明
2. 発表標題 火山性フッ素の摂取濃度を用いた人間活動の復元手法の開発
3. 学会等名 第72回日本人類学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Junmei Sawada, Masaki Eda, Hitomi Hongo, Takao Sato, Ryohei Takahashi, Takeji Toizumi, Minoru Yoneda, Taichi Hattori, Ryohei Sawaura, Eisuke Yamada
2. 発表標題 The hunting strategy in the Hoabinhian period of northern Vietnam
3. 学会等名 13th ICAZ International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤田純明
2. 発表標題 ストレスマーカーから探る縄文時代人の健康状態
3. 学会等名 第72回日本人類学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 澤田純明
2. 発表標題 東アジアの狩猟採集集団と初期農耕集団におけるストレスマーカーの出現状況
3. 学会等名 第124回日本解剖学会全国学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 篠田謙一
2. 発表標題 DNAゲノム解析からさぐる日本列島の古代人 -縄文人と弥生人の関係-
3. 学会等名 第72回日本人類学会大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 篠田 謙一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 新版 日本人になった祖先たち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	新美 倫子 (NIIMI MICHIKO) (10262065)	名古屋大学・博物館・准教授 (13901)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	澤田 純明 (SAWADA JUNMEI) (10374943)	新潟医療福祉大学・リハビリテーション学部・准教授 (33111)	
研究分担者	永谷 幸人 (NAGAYA YUKIHITO) (10844269)	伊達市噴火湾文化研究所・その他部局等・学芸員 (80123)	
研究分担者	川幡 穂高 (KAWAHATA HODAKA) (20356851)	東京大学・大気海洋研究所・教授 (12601)	
研究分担者	篠田 謙一 (SHINODA KENICHI) (30131923)	独立行政法人国立科学博物館・その他部局等・研究調整役 (82617)	
研究分担者	近藤 修 (KONDO OSAMU) (40244347)	東京大学・大学院理学系研究科(理学部)・准教授 (12601)	
研究分担者	添田 雄二 (SOEDA YUJI) (40300842)	北海道博物館・研究部・学芸員 (80101)	
研究分担者	百々 幸雄 (DODO YUKIO) (50000146)	伊達市噴火湾文化研究所・その他部局等・専門委員 (80123)	
研究分担者	西本 豊弘 (NISHIMOTO TOYOHIRO) (70145580)	伊達市噴火湾文化研究所・その他部局等・専門委員 (80123)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	伊達 元成 (DATE MOTOSHIGE) (70620897)	伊達市噴火湾文化研究所・その他部局等・学芸員 (80123)	
研究分担者	渋谷 綾子 (SHBUTANI AYAKO) (80593657)	東京大学・史料編纂所・特任助教 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関